

私にとって「ただいま」は寂しい言葉。戸を開けると、その言葉だけが、玄関から見通せる奥の部屋まで静まり返った空間に響き渡る。閉め切ったどんよりとした重い空気と家の匂い。慌てて出て行ったままの流し台と半開きの洋服ダンス。幼稚園に入園したその日から帰宅した家は留守。何度言っても返ってくる言葉が無い。次第に言わなくなり、その生活にも慣れていった。田舎から出てきた両親は共働きで貧しく、食べていくだけで精一杯だった。朝も「行ってきます」の前にはもう誰もいなかった。牛乳箱から牛乳を取り、それを飲んで鍵を閉めて幼稚園に行った。近所の子供たちの「ただいま」の音があちこちから聞こえ、それに答える「おかえり」の声。聞きたくないのに耳を塞いでも容赦なく鼓膜を震わす。独りでいることには慣れてはいるのにその言葉を聞くと、身体が強張ってしまい布団にうずくまった。小学校に上がり、時代は高度経済成長期、益々大人たちは忙しく働き、残業続きで両親の帰宅もどんどん遅くなっていった。小学二年で家事一切が私の仕事となった。夕飯を作り、独りで食べて風呂を焚き、風呂に入って寝る。寂しいのでテレビはつけっ放し。

そんなある日、学級友達の家遊びに行った。

「ただいまー」と友達は戸を開けると大きな声で言った。

「おかえりー」と直ぐに言葉が返ってきた。友達の後ろに立っていた私は、えっ！と思った。友達は振り返り、きょとんとしている私に「いつも、こう言ってるねん。」とにっこり微笑んだ。

「これやったら寂しいやろ、自分でおかえりーって言ってるねん。」

友達は、何遍もおかえりー、おかえりーと言いながら部屋の中を回った。友達の家も共働きの同じ鍵っ子だった。境遇が同じだった私たちは仲良くなり、いつも自分たちが結婚して家庭を持つ話をした。

「大きくなってお嫁さんになって、それからお母さんになって、おかえりーって言ってるあげんねん。」友達は将来の自分を想像して夢見るような目で言った。

その言葉には私は「賛成、私も。」というも相槌を打った。「ほんでから参観日には絶対行ってあげるねん。」と続けた。参観日に一度も来てもらったことの無い私たちにとって参観日は肩身の狭い日だった。クラスにはわざわざそれを指摘していじめの子もいた。そんな時は二人で言い返して追っ払った。しかし、三年生のクラス替えの時も運良く同級になれたのに彼女は夏の夏休みに突然転校してしまった。私は自分の身体半分がいきなり削ぎ取られたみたいにショックを受け、彼女が教えてくれた「自分でおかえりー」も言わなくなった。一緒に下校していた道もいっぺんに暗く見え、家にも帰りたくないの公園で時間をつぶした。今思えば時代が大きく流れていた時、決して自分たちだけが寂しい訳ではなかった。どの家庭もそれぞれの事情があり、それは今も変わらない。

その後私は二十一才で結婚、夫と飲食店を始めた。そして娘二人を授かり、店に乳母車やベビーベッドを置いて子育てをした。そのため家は帰って寝るだけの箱のようになった。娘たちが幼稚園の時は、まだ送迎バスがあり店から迎えに行けたが、小学校に上がると娘たちにその鍵の掛かった空箱のような家の物置にランドセルを置かせてから店に来させた。住宅街に

ある家は皮肉にも小学校の真ん前にあった。店はそこから二キロ近くある商店街の端で。二人は各々下校して店に came。店のドアを開け「ただいま」、そして私が「おかえり」と迎える。

できれば家で迎えてあげたいのだが…。

結局は私も自分の親と同じように子どもに寂しい思いをさせているのではないだろうか。いやいや、店といえどもちゃんと毎日子ども達の顔を見て「おかえり」と迎えているのだから、大丈夫と、自問自答した。

娘たちに空っぽの家にいらせたくないの鍵を持たせず、わざわざランドセルを入れるための物置を購入し玄関先に設置したのは、今振り返って思うと私の意地だったのかもしれない。娘たちが低学年のうちは店で宿題や勉強をさせて閉店後、私と一緒に帰宅した。それから遅い晩ご飯、一家団欒だんらんをした。やがて娘たちは高学年になり自分たちから家にいたいと言出し、私が帰宅するまでに各自の勉強を済ませ家事も手伝うようになった。そして、今度はこちらの方が「ただいま」と言う側になった。娘たちは一斉に駆け寄り「おかえり」と声を揃えて出迎えてくれた。

迎えてくれる者、待っていてくれる者がいる、それも愛してやまない娘たちが。温かく心を満たしてくれる言葉。私が切に願っていた言葉。心から感謝の気持ち湧いてくる。いい大人なのに、そして親なのに「ただいま」の言葉が寂しかった。だが、もう寂しい言葉でなくなつた。

それから十数年、娘たちは成長し巣立っていった。先日娘たちと会った時に、今更ながら「無理をさせてしまったな。」と謝ると「あの『ただいま』『おかえり』があったから今があるねんぞ。」

慰められ、私は感極まって泣いてしまった。娘たちに寂しい思いをさせたくなかったばかりに病的なまでに誰もいない家に帰宅させなかった。鍵っ子にしたくなかった。「おかえり」と出迎えたい私のエゴを押し付け「ただいま」を娘たちに掟のように無理強いしていたのではないかと思っていた私に、

「お母ちゃんの間違ってなかったよ。」と言ってくれた。

私はその言葉で救われた思いがした。

いや、本当は正直な所、自分が「おかえり」と言われたから、娘たちに自分を重ね、私が子供の頃に戻りたかったのかもしれない…。

優しい娘たちは全てを分かってくれていたような気がする。

「ただいま」は相手があってこそその言葉、そして「おかえり」もその相手へ応える言葉。

「ただいま」と「おかえり」は、対の言葉。「ただいま」あつての「おかえり」、「おかえり」あつての「ただいま」。人と人をつなぎ、絆を強める言葉。互いを気遣い思いやる大切な言葉。その言葉の意味は大きい。私は「ただいま」「おかえり」の温かい家庭を作りたかった。その夢を娘たちが叶えてくれた。

娘たちよ、本当にありがとう。